

夢の卵 育成事業

この事業は、2002年にノーベル物理学賞を受賞された故 小柴昌俊さんの「子どもたちには『夢の卵』を持ち続けてほしい」とのメッセージにちなんで企画しました。子どもたちに「いくつもの『夢の卵』をもってもらふこと」、「『夢の卵』を温めてもらふこと」、そして「『夢の卵』を孵すこと」を支援し、自分の将来を考えてもらふきっかけづくりをねらいとして、平成16(2004)年度から実施しており、今年で19回目となりました。

4月中旬から5月にかけて、県内の小学校5、6年生と中学校1、2年生を対象に、「将来の夢（＝夢の卵）」を書いた作文を募集し、その中から選んだ4名の児童生徒が、各分野の専門家に短期入門をしました。また、より多くの子どもたちの夢を応援するため、それ以外の秀でた作品を佳作として表彰しています。

小学生の部（応募数526作品）

音楽の力で人を元気にできる 音楽療法士になりたい

北林 来幸 さん（高岡市・小学6年）

介護が必要になった人に元気を取り戻してもらうために自分が何をできるかを考え、音楽療法士である丹保博美さん、釣吉美さん、道下和美さんに入門。特別養護老人ホームでのセッションに参加し、音楽療法士の業務内容や求められる技術、姿勢について学びました。



音楽療法士の概要についての講義

体験記より 音楽療法は、医療、福祉、心理など音楽以外の知識が必要なため、音楽療法士になってからも学会や研修会に参加して学び続けていることを知りました。障がいや病気の有無や年齢を問わず、すべての人が音楽療法の対象となるので、音楽療法士だけでなく他の資格も取得していろいろな知識や経験を活かし、対象者の役に立てるように学んでいきたいと思います。



特別養護老人ホームでのセッション体験



スギの伐採方法についての解説



立山室堂で森林官とパトロール体験

自然を守る森林官になりたい

寺本 芽生 さん（富山市・小学6年）

身近な自然とのふれあいの中で その素晴らしい環境（特に森林）を後世に残していく森林官に大きな魅力を感じ、林野庁 中部森林管理局 富山森林管理署に入門。森林官の仕事である国有林の管理（間伐・境界巡視等）や立山室堂における高山植物の保護などを体験しました。

体験記より 私たちが普段何気なく使っている「木」は、長い年月をかけて森林官や地元の方たちが守り、育てていることがわかりました。みんなが安全で豊かに暮らしていくには、自然を守る事が大切です。今日も自然を守るために頑張っている人たちの思いを受け継ぎ、何十年何百年先を見すえて、地域の人たちが笑顔で暮らせることに貢献できる森林官の仕事は素晴らしいと思いました。私も改めて森林官になりたいと思った2日間でした。



- ① 医師
- ② 野球選手
- ③ サッカー選手
- ④ 保育士
- ⑤ 教師



＜令和5年度の入賞者数＞

小学生の部 優秀賞（短期入門）2名 佳作 13名
中学生の部 優秀賞（短期入門）2名 佳作 15名



令和5年度 夢の卵表彰式

中学生の部（応募数563作品）

体の不自由で困っている人たちの 助ける義肢装具士になりたい

松野 瑞生 さん（富山市・中学1年）

日常生活を送ることが困難な人たちの義肢や装具をつくり、個々の生活・人生を支えたいと、富山県リハビリテーション病院・こども支援センターに入門。義肢装具士と患者さんとのやりとりも見学し、障がいのある人たちを支える意義ややりがいについて学びました。

体験記 より

医師や義肢装具士の皆さんは一人一人の患者様と向き合いながら、生活スタイルや要望、気持ちなどを聞き、患者様がやりたいと思うことを日常生活で出来るよう、使用しやすくベストな義肢や装具を作ってらっしゃいました。今回の短期入門では、義肢装具士の仕事の内容や役割を教えてくださいましたが、「義肢や装具に関わり、体の不自由な人たちを支え、助ける仕事がしたい」という気持ちがさらに強くなりました。



実際の義肢のメンテナンスを見学



リハビリ施設・用具の解説



土器の洗浄・接合体験



発掘現場で発掘体験

遺跡の発掘で富山の歴史を 解き明かす考古学者になりたい

岩崎 愛 さん（砺波市・中学2年）

身近な桜町遺跡の見学から古代のロマンを強く感じ、歴史をひもとく考古学者になりたいと、国立文化財機構奈良文化財研究所に入門。平城京跡から発掘された土器のかけらの洗浄や接合に挑戦し、実際の遺構で発掘体験をするなど、考古学者の卵として貴重な経験となりました。

体験記 より

入門前は、考古学者は漠然と想像力で仮説を立てているイメージがありましたが、今回の入門でお世話になった先生方は細かい部分に隠された手がかりや周りの状況をヒントの一つ一つの遺物と向き合っていました。先生方のような研究者になる為には、幅広い知識が必要だと気づきました。これからも遺跡や埋蔵文化財センターを訪れ、遺物の知識を深めたいと思います。